

原著論文

高等学校における保健だよりに関する調査

中島 節子・池田 みすゞ・長谷川 久江・
早川 維子・門川 由紀江

Investigation about the Health News Letters in High Schools

NAKAJIMA Setsuko, IKEDA Misuzu, HASEGAWA Hisae, HAYAKAWA Masako and

KADOKAWA Yukie

要 旨

保健だよりは、約95%の養護教諭が発行しているにもかかわらず、その評価についての研究はほとんど見られない。本研究では、高等学校に勤務している養護教諭を対象に、保健だよりの発行状況やその評価についての現状を明らかにすることを目的とし、N県の高等学校に勤務する養護教諭にアンケート調査をし、分析した結果を報告する。

養護教諭の8割は、保健だよりの評価は必要と考えているにもかかわらず、6割の人は評価していないと回答していた。

キーワード

保健だより 高等学校養護教諭 評価

目 次

- I. はじめに
- II. 研究方法
- III. 倫理的配慮
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. まとめ
- 謝辞
- 文献

I. はじめに

保健だよりは、学校保健目標を達成するための一つの手段であり、学校保健における啓発活動である。保健だよりははじめは定かではないが、1957年に、雑誌「健康教室」に保健だよりが初めて掲載された¹⁾とある。その後1958年の学校保健法の制定、2009年に学校保健安全法が制定されたことが大きな影響を与え、保護者あてに健康についての情報配信を行う方法として保健だよりが活用されるようになったと思われる。現在も保健だよりは養護教諭からの情報配信のひとつの手段であり、学校保健における教育活動の一端を担っている。しかし、法令では保健だよりを発行することを義務づけてはいない。養護教諭の専門領域に関する用語の解説集にも保健だよりという言葉は記載されていない²⁾。それにもかかわらず約95%の養護教諭が、保健行事や保健指導などを掲載しながら定期的に保健だよりを発行している³⁾。

佐藤・小浜氏の調査では保健だよりの機能に着目しながら歴史的な変遷⁴⁾をみることはできたが、内容の質を検討することはできておらず、保健だよりの内容を充実させる取り組みについては課題が残っている。また、吉原・小橋氏の調査でも、その目的は「保健の啓蒙」であるとし、わかりやすいもの、みんながよく読んでくれるものを目指しているが、保健だよりの評価は実際にあまりなされていない⁵⁾、と述べている。

このように、保健だよりの目的や活用方法、機能については、健康に関する雑誌や書籍・文献等で示されているが、その評価方法については養護教諭の研究分野でもほとんど見あたらない現状である。また、養護教諭が作成した保健だよりが、その目標達成のために活用することができたのかを評価することは、各々の保健だよりに対する新しい課題の発見や視点の変化、さらに、より学校保健目標の達成に近づくための工夫へといかすことができるのではないかと考える。

そこで本研究は、高等学校に勤務している養護教諭を対象に、保健だよりの発行状況やその評価について現状を明らかにすることを目的として行い、これからのよりよい保健だよりの作成や活用に役立てたいと考えた。

II. 研究方法

1. 調査対象

N県内の高等学校に勤務する養護教諭107人

2. 調査期間

平成25年10月～12月

3. 調査方法

養護教諭の研修会（ほぼ全員参加）の時に、研究の目的、方法について口頭で説明し、強制ではないことを確認し、調査協力のお願い文を添付した自記式質問紙を配布した。同意を得られた人は、その場で記入し封筒に入れて提出した。その場で提出できない人は、後日記入し郵送により提出してもらった。

4. 調査内容

- 1) 属性（年代、経験年数、昨年度の勤務先の生徒数）3項目
- 2) 保健だよりについての質問項目：作成の有無、必要の有無と理由、発行の目的、発行回数、参考にしている文献、形式、作成期間、配布方法、活用方法、自己評価の方法、自己評価の必要性の有無とその理由、保健だよりについて意見をもらったことの有無とその内容
※今回の調査で「保健だより」とは、養護教諭が作成している保健だよりと限定し、生徒保健委員会が主体で作成している保健だよりは除いた。

5. 分析方法

対象者の属性、保健だよりについての質問項目は、回答結果を単純集計した。本研究では、評価について検討することを目的としているため、分析の視点として「評価の有無」について χ^2 検定を行った。統計解析には、SPSS. Ver20を使用した。

III. 倫理的配慮

質問紙の記入は任意とし、無記名とした。研究成果は、被験者を特定できないようにしたうえで発表することを説明し、質問紙の提出をもって同意されたとみなした。なお、本研究は松本大学研究倫理審査委員会の審査（平成25年10月、承認番号第48号）を受け、承認を得て実施した。

IV. 結果

アンケート回収数90人(回収率84.1%)のうち、属性の記載のない人を除外した結果、有効回答数89人であった。

1) 属性

年代は、20代10人、30代15人、40代30人、50代34人(図1)、経験年数は、初任者3人、10年未満18人、10年～20年未満21人、20年以上47人であった(図2)。

勤務先の学校の規模は(表1)のとおりである。

2) 保健だよりの発行状況

保健だよりを発行している人は79人(88.8%)、発行していない人は9人(10.1%)であった(図3)。発行している人の中で、ホームページで配信している人も10人あった。

保健だよりが必要であると考えている人は88人(98.9%)であった。保健だよりの必要な理由(自由記載)は、会話のきっかけになる68人、タイムリーな配信ができる65人、全校に配信できる55人、正しい知識の伝達53人、保健指導の手段として48人、養護教諭の思いを知らせる41人、生徒に関心を持たせる35人、その他5人(連絡の手段として、同じ情報を共有できる、保健委員会の活動のきっかけになるなど)であった。

保健だよりが必要ないと思う理由は、「プリントしなくても伝えられる。」「字の読めない子もいる。」「紙がもったいない」などであった。保健だよりの発行回数は、必要なとき43人、月に1回20人、月に1回と必要なときに16人、その他10人であった。

作成期間は、1週間未満42人、1～2週間27人、1日6人、2～4週間6人であった(図4)。保健だよりの発行の目的は(複数回答)、図5のように、知識の伝達71人、問題意識・関心を高める66人、児童生徒の様子を伝えるため33人、学校保健計画に沿った保健指導をするため28人、実践の記録として3人、その他3人であった。

作成にあたり参考になっているものは、専門の雑誌89人、インターネット情報64人、県からの通達55人、新聞44人などが上位を占めた。

配布方法は、全員に配布44人、クラスに数枚と掲示20人、全員に配布と掲示14人、その他5人であった。

作成した保健だよりの活用方法は、担任より配

布53人、担任が読み合わせしながら配布12人、担任が保健指導しながら配布16人、養護教諭が生徒保健委員会の保健指導で使う26人などとなっていた(表2)。この中で、保健だよりを配布するのみの人は38人であった。

3) 保健だよりの評価の実際

① 保健だよりの発行時の評価と評価の実施方法

保健だよりを作成している人(79人)の中で評価していない人は53人(67.1%)であった(図6)。

評価していない人の理由(複数回答)は、方法がわからない25人、評価できない17人、時間がない8人、その他4人であった。評価している人の評価方法は、生徒に感想を聞く21人、教職員に感想を聞く16人、アンケート調査2人、学校の自己評価の中で行う1人であった(表3)。

② 保健だよりに対する評価とその必要性

自分の作成した保健だよりを評価する必要があるかという問いに対しては、72人(80.9%)の人が必要であると回答した。その理由(複数回答)は、次回の参考にする40人、実態に合った情報を提供する40人、きちんと伝わっているか知る39人、効果的に伝える対策を考えるため33人、生徒のニーズを知る30人、マンネリ化を防ぐ28人、わかりやすかったか知る23人、自分のモチベーションをあげる14人であった。

評価は必要ないと思っている理由は、「何をよしとするか」、「誰に評価してもらうかなどの基準がないから」、「それぞれの受け止め方でいいと思うから」、「評価を考えて作成していないから」、「保健だよりは一方通行であると思うから」、「近年は何もかも評価、評価で、評価のための仕事になるのが怖い」、「日常の養護教諭としての評価が自然に保健だよりの評価にもつながると思う」などであった。

③ 保健だよりに対するフィードバックの有無

自分の作成した保健だよりに対して「よかったよ」などの意見をもらったことがあるかという問いに対して、60人の人があると回答した。その意見の内容は、「勉強になった」「いつも参考にしています」、「病気にかかった時に役だった」、「初めて知った」など好意的な意見が50人、「こんな内容を載せてほしい」、「イラスト描いてあげる」など今後の要望などが8人、「わかりにくい」、「読んだらすぐ捨てるよ」など、マイナスに受けとれる意見が3人であった。

4) 発行した保健だよりに対して評価をしている人

の検討

保健だよりを発行している人はどのような人達なのか検討するために、評価している人としていない人の2群に分けて χ^2 検定を行った。

結果は表4のとおりになった。保健だよりの配布方法では、配布時に声掛けや保健指導を行っている人の方が評価していた ($p=0.04$)。また、保健だ

よりを全員に配布し、且つ掲示をしている人に評価している人が多かった ($p=0.001$)。配布した保健だよりについて「よかった」などの意見をもらった人の方が、評価している人が多かった ($p=0.006$)。年代や勤務年数、学校の規模、発行回数などで評価の有無で差はなかった。

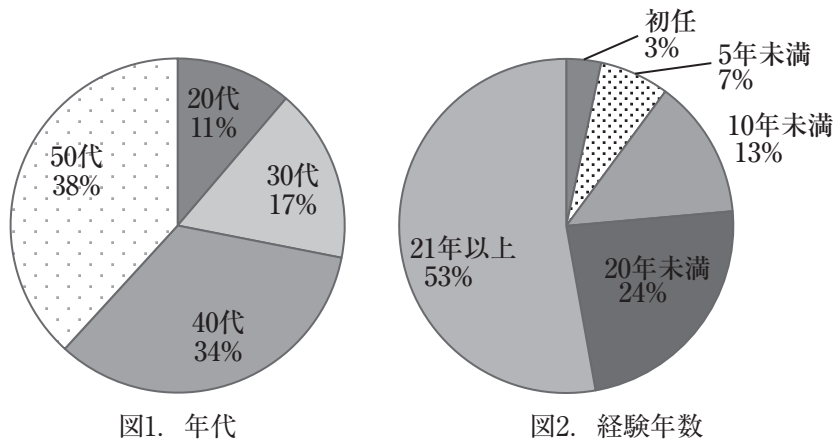


表1. 昨年度の勤務校の規模

生徒数	度数 (人)
150人未満	19
400人未満	24
750人未満	29
750人以上	16
未記入	1
合計	89

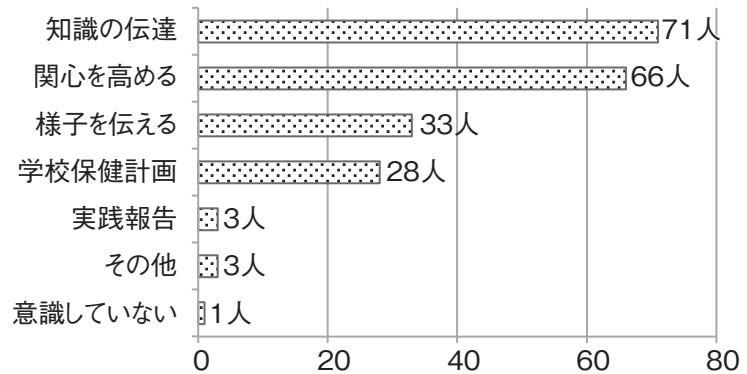
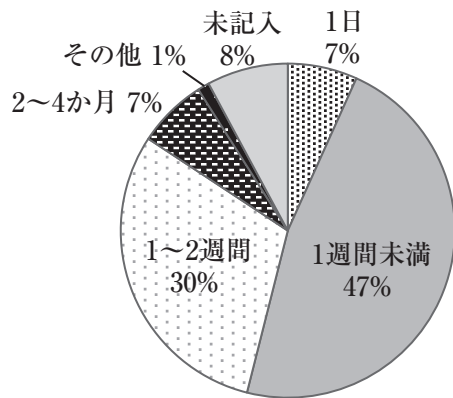
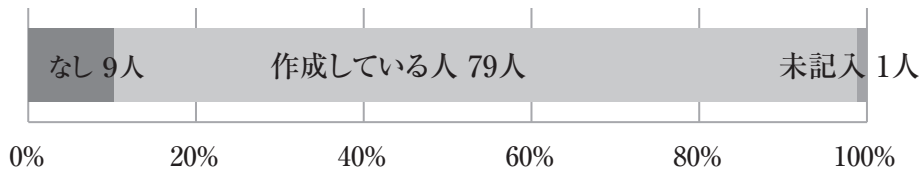


表2. 作成した保健だよりの活用方法 (複数回答)

項目	度数(人)
ショートホームルーム (以下SHR) 等で担任より配布してもらう	53
SHR等で担任に、読み合わせをしてもらうよう依頼し、配布してもらう	12
SHR等で担任に、保健指導をしてもらうよう依頼し、配布してもらう	16
養護教諭が直接クラスに出向き、配布する	3
養護教諭が個別の保健指導で使う	4
養護教諭が集団の保健指導で使う	3
養護教諭が生徒保健委員会で使う	26
その他	7

表3. 評価方法(複数回答)

項目	度数(人)
生徒に感想を聞く	21
職員に感想を聞く	16
アンケート調査	2
学校の自己評価の中で行う	1

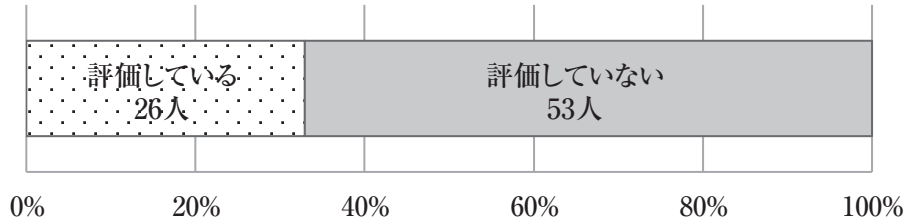


図6. 保健だよりの評価の有無

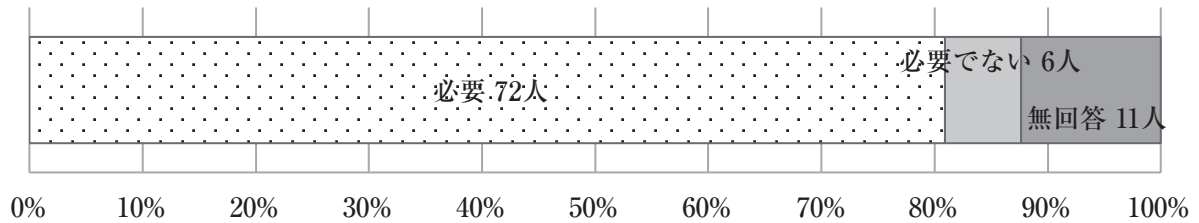


図7. 保健だよりへの評価は必要か

表4. 評価を行っているか

項目	評価	している	していない	p
年代	20代	2 (2.6)	7 (9.0)	0.503
	30代	3 (3.8)	11 (14.1)	
	40代	10 (12.8)	19 (24.4)	
	50以上	11 (14.1)	15 (19.2)	
勤務年数	初任	0 (0)	2 (2.6)	0.655
	5年未満	3 (3.8)	3 (3.8)	
	10年未満	2 (2.6)	7 (9.0)	
	20年未満	8 (10.3)	13 (16.7)	
	20年以上	13 (16.7)	27 (34.6)	
配布方法	全員に配布	10 (13.3)	31 (41.3)	0.001 **
	クラス数枚と掲示	3 (4.0)	14 (18.7)	
	全員と掲示	11 (14.7)	3 (4.0)	
	その他	2 (2.7)	1 (1.3)	
発行回数	月に1回	7 (9.1)	10 (13.3)	0.641
	月に1回と必要なとき	7 (9.1)	9 (11.7)	
	必要なとき	10 (13.0)	29 (37.7)	
	1回各学期に	1 (1.3)	1 (1.3)	
	その他	1 (1.3)	2 (2.6)	
配布方法	配布のみ	10 (13.3)	31 (41.3)	0.040 *
	配布時に指導を加える	16 (21.3)	18 (24.0)	
学校規模	学校規模400人以上	11 (14.7)	28 (37.3)	0.261
	400人未満	15 (20.0)	23 (30.7)	
意見をもらう	意見をもらった	24 (32.0)	34 (45.3)	0.006 **
	なし	1 (1.3)	16 (21.3)	

人()内は% Pearsonの χ^2 * $P \leq 0.05$ ** $p \leq 0.01$

V. 考察

養護教諭が作成・発行している保健だよりに関する研究文献が少ない中、今回はN県の高等学校における保健だよりの発行状況などその実践について明らかにした。

アンケートで得た回答から、保健だよりの発行の目的として「健康知識を伝達する」、「問題意識や関心を高めるため」と答えた人が多く、養護教諭の専門性をいかした保健指導資料を、保健だよりという手段で伝えていることがうかがえた。また、参考している文献について、「インターネット情報」と答えた人も多く、保健だよりをホームページに掲載している人もおり、IT機器を活用し、その利点をいかして保健だよりを配信していく時代であると感じる。

保健だよりに関して、「内容がマンネリ化している。何を書いたら良いか迷っている。書いた保健だよりを十分活用できない。子ども達の様子をもっと伝えたい。自分のオリジナルの保健だよりを作りたい」などの現場の課題⁶⁾もあげられている。1枚の保健だよりを作成するのに1週間余り時間をかけ、様々な情報を活用し検討を重ねている。その保健だよりの評価についての回答からは、「読まれているのか」、「生徒たちの役にたっているのか」について、養護教諭は日々疑問を持ちながら作成し配布していることがわかった。今回の調査結果でも、9割の養護教諭が保健だよりを作成しており、そのうちの8割の人が、自分の作成した保健だよりを評価することは必要と回答している。評価が必要と考える理由の中にも、「きちんと伝わっているか知る」、「生徒のニーズを知る」、「わかりやすかったか知る」など、自分が発行した保健だよりが生徒達に伝わる情報配信になっているかを評価したいと考えていることがうかがえる。林、鈴木らの文献等⁷⁾⁸⁾でも保健だよりの評価は必要と示されているにもかかわらず、現状は全体の約6割の人は保健だよりについての評価を実施していないと回答している。これは、評価の方法がわからないなどの理由によるものと考えられる。

また、保健だよりを配布しているのみと回答している人たちは、評価していない人が多かった。難波らの研究では、高校では保健だよりを配布するのみが75%であった⁹⁾が、今回の調査では42.7%と減少しており、作成した保健だよりを積極的に活用しようとしていることがうかがえる。

これらのことから、養護教諭が、様々な文献を検索し時間をかけて作成している保健だよりに対し、読み手がどのように読み受け止めているのか、確認したり、改善につなげたりするためにはやはり、評価する必要があると思われる。今野は「保健だよりの検討を行い評価することは意義深いことである。養護教諭の専門性と責任に裏付けられた作成となるよう、発行のたびに検討し向上していくこと」¹⁰⁾と、述べている。生徒等にアンケート調査をすれば、受け手側の感想などが明確になり評価しやすい。しかし、教育現場の現状を考えると、アンケート用紙を配布し回収することは容易ではない。現にアンケート調査を実施した養護教諭は、学校の生徒数が少人数なので実施できたなどと振り返っている。評価というと点数化されたもののようにとらえがちであるが、生徒や教職員からの意見をもらうことも評価の一手段と考える。その意見を反映することで、保健だよりの配布、評価、改善へとつなげていくことが可能である。

今回の研究では、評価についての定義が明確さに欠けていたため、何ををもって評価としてとらえているのか回答者によって違い、具体的な事象として明確にすることができなかった。生徒や教職員から意見をもらうことも評価につながると提示すれば、評価していると回答した人は増えたかもしれない。どのような活動が評価となり、より効果的な活用へとつながっていくことができるのかを検討することが今後の課題である。

今後、保健だよりの改善のために必要な情報を集約するための項目を検討してみたり、その評価方法を提示したりすることで、より良い保健だよりの作成につながり、学校保健活動の推進に寄与できるのではないかと考える。

VI. まとめ

今回の調査では、保健だよりは約9割の養護教諭が、知識の伝達や問題意識・関心を高めるために作成していた。回答者の8割の養護教諭は保健だよりの評価は必要と考えているにもかかわらず、6割の人は評価していないと回答していた。その理由について「評価できない」、「方法がわからない」であった。評価していると回答した人の評価方法は、生徒や教職員に感想を聞く、生徒にアンケート調査を行うなどであった。また、配布時に養護教諭や担任が声掛け等の指導を加えている人に評価し

ている人が多いことがアンケートでは示された。

謝辞

貴重な時間を割いてアンケート調査に協力していただいたN県の高等学校養護教諭の皆様にご心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

文献

- 1) 鈴木裕子. 学校保健教育としての保健だより. 東山書房. 健康教室2011年10月臨時増刊号 第62巻 第13号. p.10-11 (2011)
- 2) 養護教諭の専門領域に関する用語の解説集<第2版>. 日本養護教諭教育学会 (2012年10月)
- 3) 保健だよりと掲示物. 東山書房. 健康教室 2011年10月臨時増刊号 第62巻 第13号 2 (2011)
- 4) 佐藤佳代子, 小浜明. 「保健だより」に関する一考察 —雑誌『健康教室』に掲載された保健だよりの機能の推移と1987・2010年の政策実態に関する比較. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集 Vol.12. p.51-58 (2011)
- 5) 吉原瑛, 小橋貴子. 保健指導の教具・教材・指導に関する研究 (1) —保健指導教材として保健だよりの効果—岡山大学教育学部研究集録 (68). p.15-23 (1985)
- 6) 三木とみ子編集. 改訂保健室経営マニュアル その基本と実際. ぎょうせい, p.222-223 (2013)
- 7) 林典子. 養護教諭の活動の実際. 東山書房. p.208-209 (2011)
- 8) 鈴木裕子, 松浦智美, 齋藤由美子, 菊池美和子. 読んでもらえる保健だよりの工夫. 第一法規. 第2章8. p.8 (2013)
- 9) 難波英子, 中桐佐智子, 津島ひろ江, 松岡弘. 保健だよりに関する実態調査. 学校保健研究 Vol.29 No.11. p.543-549 (1987)
- 10) 今野洋子. 保健だよりの書き方. 東山書房. 健康教室2011年10月臨時増刊号 第62巻 第13号. p.14-16 (2011)